

## John Barth と Baltimore — その作品に見る都市性と地方性 —

竹 下 幸 男

### 要 旨

20世紀を代表するアメリカの小説家 John Barth は、1930年、Maryland 州 Dorchester 郡の郡都である Cambridge に生まれた。Barth は、Baltimore にある Johns Hopkins 大学に学び、小説家になることを志した。その契機として、Baltimore の文学史と、それを包摂する Maryland の文学史の存在が、Barth に影響を与えている。

本稿では、まず Barth が Baltimore の文学史についてどのように書いているかを検討しながら、その特徴を概観し、Barth の Baltimore の文学に対する関心の有り様を探る。次に、具体的に Barth の作品を取り上げて、その中で都市 Baltimore がどのように表象されているかを明らかにし、Barth の作品における都市性と地方性の相克が、どのように作品構造に反映しているかを検討する。最後に、Maryland の文学史の特徴を示しながら、それが Barth の作品にどのように吸収されているかを検討する。

このような手続きにより、Baltimore の文学史や Maryland の文学史が、Barth 文学の核を形成すると同時に、都市性と地方性という二項対立とそれが無化される過程において、メタフィクションに必要な視点を Barth の作品に付与していることを明らかにする。

**キーワード：**ジョン・バース、メタフィクション、ボルティモアとメリーランドの文学史、都市表象、包摂構造

### はじめに

アメリカの現代小説家 John Barth は、1930年、Maryland 州 Dorchester 郡の郡都である Cambridge に生まれた。Barth は、初め編曲家を目指して New York の Julliard 音楽院で学んだが、挫折し、その後、Baltimore にある Johns Hopkins 大学のジャーナリズム専攻に進学した。この大学で Barth は小説家になることを志した。その理由として、スペイン人の詩人 Pedro Salinas や、文献学者の Leo Spitzer らの薫陶を受けたこと、また、同大学付属図書館で司書のアルバイトを始めたために古今東西の作品を読

みあさるようになったことなどの、Baltimore での文学修行とも云える都市経験が考えられる。この大学時代の経験が Barth の作家としての出発点になっている。いわば、Baltimore は John Barth にとって、作家としての誕生の地と云うことができる<sup>1)</sup>。また、作家として成功した後に、Barth は Johns Hopkins 大学の教授になり、教師として、かつ作家としての長いキャリアをこの地で過ごしている。Barth の作品にとって、Baltimore での文学経験と都市 Baltimore は、どのような意味を持つのだろうか。

Barth の作品において、都市はその主要な舞台としては選ばれていないにも拘わらず、都市と作品の関連を論じることは重要な意味をもつ。ひとつには、Barth 自身が Baltimore という都市において文学経験を積んだ、いわば自伝的側面からの重要性であり、もうひとつは、都市表象の少なさが作品においてもつ意味である。書かれないことによって、都市は作品の中で、抹消された存在として重要な働きを示し、そのことが書かれた事柄の特異性を際立たせるのである。しかし、Barth の作品における都市の表象について、そのユニークさを探すならば、都市を肯定的に捉えているか否定的に捉えているのか、曖昧である点であろう。このような傾向は、メタフィクションとも呼ばれる Barth 作品の特徴である両面性や多義性に通底する。

都市というファクターを通じてアメリカ文学を読む場合、一方には都市を肯定的に、他方には否定的に捉える作品があるだろうことは容易に想像が付く。しかし、これも予想できることだが、文学においては、都市の否定的な側面が強調される傾向が強い。このような、いわば「反都市観」とも呼べる都市に対する反応は、アメリカ文学においては常套手段であると岩本巖は指摘している<sup>2)</sup>。岩本はその理由を、Blanche H. Gelfant の *The American City Novel* を引き合いに出しながら、次のように説明する。「というのも、彼女 [Gelfant] は今世紀におけるアメリカの大都市の性格を考慮した上で、今世紀文学の中で描かれてきた人間の孤立感、疎外感、共同社会の崩壊、あるいは愛とか宗教などの人間の連帯感を作るものの不能などが、巨大化したアメリカの都市故に生じたことを論じているからである」(62)。文学が都市を描く際に、このような常套手段に陥ってしまうことはよくみられることである。Barth の作品における都市表象も、いくつかの点で、このクリシェから逃れてはいない。

一方で、人間の孤立感や疎外感を表象する都市性の対立物として、共同体や自然を表象する舞台としての地方性がある。Barth の作品については、都市性よりもこの地方性が論じられることが多い。事実、Barth の作品の多くは、大きな都市ではなくて、地方の小さな町や、故郷

でもある Maryland 州の自然を舞台にしている。したがって、Barth の作品と都市との関連を論ずることは二重の困難さを伴う。クリシェと化した都市表象から自由な Barth 特有のユニークさを発見することと、地方性を強調される傾向の多い Barth の作品に見られる都市性のもつ意味を発見すること。本稿はこのふたつの課題に答えようとするものである。

まず、Barth 文学において重要な意味を担う都市 Baltimore の文学史を、Barth がどのように理解しているのか検討することから始めよう。

## 1. Barth と Baltimore の文学の伝統

以下は Barth の 8 冊目の小説である *Sabbatical* (1982) からの引用である。

No no no, Edgar Poe:  
Don't go back to Baltimore'.  
You'll get mickey-finned for sure...  
Quoth the raven: Baltimore.

And say, do we see Mister Francis  
Scott Key floating out past the FSK  
Bridge? Are we dreaming? Whose  
pinstripes and screen stars? Through  
the tenderless night Scott Fitzgerald  
has drunk; Zelda's violently screaming  
Back, back, from the times of our  
lives through the space of our place:  
(207)

この場面では、登場人物であり語り手でもある夫婦が同じ夢を見る、その夢の内容が描かれている。それは時間を過去へと遡る夢で、自分たち自身が受胎する場面などを含み、最後には宇宙創生ビッグバンにまで辿り着く。引用は、その途中の部分だが、この夫婦がサバティカルを過ごす地理的状況が夢に影響し、Chesapeake 湾沿岸の都市 Baltimore の歴史が描かれている。

まず、詩の形式を借りて Edgar Allan Poe が

言及される。Poeは1809年、Bostonに生まれ、Virginia州Richmondで育ったが、35年頃Baltimoreに移り、そこでパトロンを得て、雑誌編集者として、また、作家・詩人として活躍を始めた。PoeにとってBaltimoreは文学修行の地であり、同時に職業作家としての生誕の地であるとも云える。引用では、Baltimoreで書かれたPoeの有名な詩"The Raven"において繰り返されるフレーズ"Quoth the Raven 'Nevermore'" (623)を、BarthにとってもPoeにとってもゆかりのある土地であるBaltimoreと韻を踏ませながらパロディにしている。引用したBarthの戯作詩の1～3行目には、同じく"Baltimo'"と"Poe"の恐らくは意図的に下手な韻を踏ませながら、Baltimoreでアルコール中毒のために夭逝したPoeのエピソードが書き込まれている<sup>3)</sup>。

先ほどの引用中に続いて登場するFrancis Scott Keyは、1941年にアメリカ国歌に正式に制定された、"The Star-Spangled Banner"を作詞した人物である。Keyは法律家であり、かつ、詩人でもあった。Keyが"The Star-Spangled Banner"を書いたときのエピソードは、アメリカ史において有名である。1812年に始まった第2次米英戦争中の1814年9月13日、Baltimore港の入り口にあるFort McHenryは、イギリス海軍の砲撃に一晚中耐えぬきBaltimoreを死守した。Keyは訪れていたBaltimoreで、砲撃の翌朝、まだ星条旗が翻っているのを見て感動し、この詩を書いたと云われている。Baltimoreには、Keyの彫像が今もあり、引用文中にあるFSK橋は、Keyに因んで名付けられている。

Keyの"The Star-Spangled Banner"は大流行をしたのだが、それは詩の愛国的な内容によるところが大きい。だが、それ以外にも、Baltimoreを中心とした文化的状況がこの歌の流行に役買っている。当時のBaltimoreにあった知識人グループの間で、音楽が流行していたこと、さらにその音楽を（つまり楽譜を）出版するのを援助した人びとがいたという事実があった。このグループにはPoeの父親も参加していた。また、Baltimoreは当時、音楽の出版における中心地でもあった。引用文中にある"pinstripes and screen stars"が、星条旗を受

けているのは云うまでもないだろう。

引用では、さらに、アメリカのジャズ・エイジを代表する作家F. Scott Fitzgeraldと、その妻Zeldaが言及されている。*The Great Gatsby* (1925)が代表作であるFitzgeraldは、Keyの血縁にあたる。Keyに因んだF. Scottを名前にもつFitzgeraldは、自分の"great-great uncle"にあたるKeyを尊敬していたようだ。Baltimoreに住んでいた当時に、友人に宛てて書いた手紙から、Fitzgeraldは尊敬するKeyの彫像が窓から見える建物に住んでいたことがわかっている(Shivers 241)。

Fitzgeraldは1931年にBaltimoreに引っ越し、1938年まで暮らした。これはFitzgeraldの家族と一緒に暮らした最後の期間になった。Fitzgeraldは1940年に死亡し、その前に、妻のZeldaは神経の病が高じて、療養所での生活を余儀なくされている。Fitzgeraldが家族でBaltimoreへ移ったのは、そのZeldaの神経性の病を治療することを目的としていた。ZeldaはBaltimoreのJohns Hopkins病院に入院し、そこで、小説*Save Me the Waltz* (1932)を執筆、出版した。一方で、この転地はFitzgeraldにも良い影響を与え、この時期を代表する長編となる*Tender Is the Night* (1934)を執筆、出版した。Barthの引用文中にある"the tenderless night"が、この作品をもっていることは説明の必要もないだろう。

本節の冒頭に挙げた引用の、わずかな数行の内に、BarthはBaltimoreの文学史のエッセンスとも云うべきエピソードを紹介している。これは*Sabbatical*の語り手である夫婦について、妻が英文学者であると同時にPoeの子孫である可能性があり、夫は作家を目指し修行中でKeyの子孫であると設定されているからである。ふたりがサバティカル休暇を楽しんでいる船の名前はPoe-Keyとされている。しかし、このような設定を利用しながら、ここでBarthは、自らがBaltimoreの文学伝統に連なる作家だと宣言しているのではないのだろうか。本節冒頭の引用は、英文学者でもあるBarthによるコンパクトなBaltimore文学史であると同時に、Baltimoreの文学伝統へのオマージュでもある。

現実の都市ではなく、都市における文学伝統が Baltimore へのオマージュとして描かれていたことから推測できるように、ここでは、Baltimore はフィクションの中のアイコンであり、現実を表象するための舞台ではない。これは、現実模倣の文学とは異なり、メタフィクションという小説手法を意識的に取り入れる Barth の創作態度を反映したものである。一方で、例は少ないのだが、Baltimore、あるいは都市そのものが作品において重要な意味を担うことがある。その数少ない例の内のひとつを次節で検討することによって、Barth 作品における都市の機能を検討する。

## 2. *The End of the Road* における都市

Barth の作品において都市が重要な役割を担う作品は多くない。むしろ、表面上、都市は積極的に描かれない傾向が強いと云えるだろう。いわば、隠れた舞台として利用され、都市は直接には描かれないことが多い<sup>4)</sup>。例えば 2 冊目の小説である *The End of the Road* (1958) を検討してみよう。

Baltimore にある Johns Hopkins 大学の大学院生である語り手 Jacob Horner は、口頭試験をパスした後、修士論文を書き上げることができない。誕生日の前日、自身の行動に積極的な理由のないことに気づき "I had no self-convincing reason for continuing for a moment longer to do any of the things that I happened to be doing with myself" (86)、住居である大学の寮がある Baltimore を離れようとする。Pennsylvania 駅で、駅員から示された行き先についての多様な選択肢に直面した Horner は、そのうちのひとつを選ぶ理由を見つけることができず、麻痺状態に陥る。

Shortsighted animals all around me hurried in and out of doors leading down to the tracks; trains arrived and departed. Women, children, salesmen, soldiers, and redcaps hurried across the concourse toward immediate destina-

tions, but I sat immobile on the bench...

If you look like a vagrant it is difficult to occupy a train-station bench all night long, even in a busy terminal, but if you are reasonably well dressed, have a suitcase at your side, and sit erect, policemen and railroad employees will not disturb you. (87-88)

この場面は *The End of the Road* において都市が詳しく描かれた唯一の例である。

駅 "Terminal" が作品タイトル *The End of the Road* に呼応することや、この作品が、タクシーの運転手に行き先を告げる Horner の "Terminal" というセリフで終わることからも、この場面の作品においても重要性は窺われる。そのため、この場面は多様な解釈が可能なのだが、あくまでも都市を視野に入れて考えるならば、ここで描かれているのは、駅をその象徴的な場所とする都市における人間の孤立感、他者に対する無関心であり、その社会から切り離されたひとりの人間である。ここでは、ひとはその人間性に拠ってではなく、社会的役割や服装によってのみ表象される。内部にどのような異常を抱えていようとも、「まっとうな身なり (well dressed)」をしていれば誰も関心を示さない。これは、アメリカのみならず、20 世紀の都市が抱えた人間疎外の問題である。

その後一晩、姿勢を変えることなく座り続けた Horner は、正体不明の黒人医師により麻痺から救い出され、行動をとめることになる。最後まで名前の明かされない黒人医師は、麻痺を専門に治療している。やがて、治療の一環として、Horner は Baltimore 近郊の小さな町 Wicomico の州立大学で文法教師として働くことになる。そこで Horner は同僚の歴史教師 Joe Morgan の妻 Rennie と姦通を犯す。すべてを論理的に言葉で説明しなくては気が済まない Joe の倒錯した論理と倫理が命じるまま、Rennie と Horner は気が済まないままに姦通を繰り返すことを強要される。結果、Rennie は妊娠し、父親はどちらかはっきりしない。Joe に決断を迫られた Rennie は、自殺するか中絶

するかを選択肢として呈示する。Rennie に自殺してもらいたくない Horner は、非合法の中絶手術の準備をすると云う。

ここで、作品が発表された時代でもあり、作品の舞台ともなっている当時の、堕胎をめぐるアメリカ社会の状況について触れておく必要があるだろう<sup>5)</sup>。

20世紀の初頭において、アメリカではほぼ全土で堕胎が非合法となり、堕胎が必要となる場合、それは秘密裡に行われることが多かった。大恐慌の時代には、生活難で堕胎を求める女性が増え、治療という名目で中絶は増加した。その反動で、1940年代から50年代にかけては、警察の取り締まりが強化された。そのような状況下で、堕胎を受けようとする場合、可能なのは「治療」を名目とした合法の堕胎か、母体にとって危険な非合法の堕胎である。治療目的の合法的堕胎については、母胎の生命を守るための場合のみ許された。合法的な堕胎のための理由は、様々ではあるが、「精神的理由」を根拠に堕胎が行われることがあった。ところが、50年代には、このような「精神的理由」による堕胎は厳しく審査されるようになる。

小説に点在するいくつかの情報を手懸かりにすれば、Rennie の堕胎が行われたのは、1953年のことだとわかる。Rennie の堕胎は、死亡という不幸な結果に終わり、そのために警察は調査を始める。Joe が口を閉ざしているため、何も明らかににはならないのだが、妻が非合法の堕胎のすえ死亡したという噂は、勤め先の大学にも伝わり、職を追われることになる。このような小説の設定には、当時のアメリカ社会の状況が色濃く反映されている。

Horner は Wicomico 在住の医者に手当たり次第に電話をかけ、堕胎を依頼するのだが、その際の口実は、心理的な理由による母胎の生命の危険である。だが、大抵の医者は Horner の依頼を断る。ある医者はその理由を次のように述べる。"It's not what the law says, I'm afraid: it's what the people in town *think* the law says..." (186). ここで問題になっているのは、堕胎そのものよりも、堕胎の引き起こす社会的な影響である。Joe が最終的に職を追われることから、堕胎の与える社会的影響

は窺える。

しかし、そのような Horner の苦勞に報いてくれる医者が現れる。その医者は Wicomico に移ってきて開業したばかりの若い医者のものである。Horner とは電話越しに話す場面しかないため、明らかなことはわからない。しかし、この医者は、保守的な Wicomico の堕胎に対する態度に批判的であり、自ら「なりたくとも進歩的になれない "We can't always be as liberal as some of us might like to be" (188)」と云う。50年代には、堕胎に対する厳しい規制と同時に、その緩和と中絶の合法化を求める動きが現れ始めるのである。この医者が、Horner の依頼する堕胎に対して示す理解は、地方の小さな町である Wicomico で、外から移住してきて開業することの困難を示唆すると同時に、堕胎に対する当時の激しい保守反動の危険性をも暗示する。

この医者は Horner に堕胎の条件として、精神科医の宣誓供述書を要求する。なぜならば、「心理的な病状がどれほど深刻なものか疑問であり、問題にしようとする人がいれば、それは証明困難なものだから "the question is whether her psychological condition is as serious as you believe it is. That would be a difficult thing to prove if anybody wanted to make an issue out of it" (187)」である。この求めに応じて、Horner は精神科医のふりをして、公証役場へ赴き、自分で書いた偽の診断書にいと簡単に公証人の証明を手に入れる。このことは、現実の社会における堕胎の根拠としての「精神的な理由」が、捏造しやすいものであったことを示している。

Rennie を自殺から救うために、このような困難にあえて挑もうとする Horner とは対比的に、Joe は堕胎を受けることの危険を十分に承知している。以下は中絶に拘わる Joe のセリフである。

"Where in the hell are you [Rennie] going to find an abortionist around here?" Joe asked disgustedly. "This isn't New York." (176)

"... I don't believe there's an abortionist in this county." (177)

"And you [Rennie] don't know any [abortionist] in Baltimore or Washington or anywhere else..." (177)

Joe の認識によれば、堕胎は都市においては可能だ。ここでは、堕胎を許さない保守的な町である Joe たちの属する共同体と進歩的な都市とが対比されている。また、Joe は次のようにも述べる。

"... Rennie's in perfect health, and the only abortion she could get even in the city would be a half-ass job by some half-ass doctor who could mess her up for the rest of her life." (180)

ここでは、都市において堕胎を受ける場合でも、Rennie のような健康な女性は、合法的な施術は望むべくも無いという認識がある。都市においても地方の共同体においても、合法の堕胎を受けることは同様に困難である。したがって、どちらにおいても非合法の処置を受けざるをえないのだが、地方の共同体での場合の方が都市での場合よりも困難になるのは、処置そのものではなく、狭く保守的な共同体においては、その事実が広まりやすいこと、そのために合法的堕胎が必要であるとしてもそれを受けにくく、医者もあえてやりたがらないことである。実際、Rennie は子供の頃からのかかりつけの医者、堕胎のための薬を処方してくれるように依頼するのだが、厳しく叱責された上で拒絶される。

結局、Rennie は、Horner が麻痺の治療を受けている正体不明の黒人医師による搔爬を受け、それは失敗に終わる。Joe の言葉を借りれば、"half-ass doctor"による"half-ass job"を受けて死亡することになる。つまり Rennie は、Joe の言い分によれば、都市で受けるのと同じ様な処置を受けるのである。だが、同じ様な処置を受けるにせよ、Wicomico で受ける場合と、例えば Baltimore で受ける場合とでは、大きな

違いがある。それは、共同体における倫理観と個人の問題であり、都市においては人間が孤立化・疎外されているために、非合法堕胎が受けやすいとされている。

小説の後半にある、堕胎を巡るエピソードからもわかることは、*The End of the Road* において、都市は人間の孤立化と結びつけられており、その対極として Wicomico という登場人物たちの属する共同体がある。Horner は、都市 (Baltimore) になじめずにそこを離れて共同体を求めるのだが、その行為は共同体に属する人々を不必要に傷つける結果になる。物語の最後で、Horner は Wicomico を去るのだが、行く先は麻痺を治療してくれるという黒人医師の「再生復帰院」であり、この意味で彼は別の共同体を目指すと言えよう。

一方で Joe は、New York の大学を出た後、博士論文を執筆しつつ Wicomico で教鞭を執っている。Wicomico での生活は、余裕を持って博士論文を書くためである。論文執筆の調査のために、Joe は大きな図書館のある都市へと出掛ける。Horner と Rennie が姦通を犯すのは、そのような Joe が不在の時である。Joe にとって Wicomico での生活は、論文執筆のための一時的なものであり、このことから、彼がその共同体に属していない事がわかる。Joe は Horner とベクトルは違えども、共同体になじめない男である。そして、うまく共同体と折り合いを付けることができないふたりの男の間に立って、本来、共同体に属していた女性である Rennie が犠牲となるのである。

Horner と Joe は、ともに Wicomico という地方の共同体の中で孤立した存在である。Horner は治療のために移ってきたよそ者であり、職を得たとはいえ、その共同体での生活を確立する前に Wicomico を去る。Joe の場合、Wicomico は論文執筆のための通過点であり、教職に関しても、いずれ都市部の大学へと移るつもりである。そのことは、職場である大学での Joe の様子に示されている。Horner を面接する大学の委員会において、Joe は他の委員とは異なり、Horner の職を得るための芝居に騙されない。また、他の委員達も Joe には一目置いていることが明らかにされている。

孤立した人間を描くのに、都市を舞台に設定する小説は多々あるが、*The End of the Road* の場合、その舞台を都市とは相反する地方の共同体としている。これは都市を舞台にした人間の疎外感・孤立感というクリシェを逆用した Barth の戦略ではないだろうか。人間が孤立していると一般に考えられている都市においてよりも、共同体が維持されている地方において人間の孤立感を表現した方が効果的だからである。だが、共同体における孤立を描くための、単なる対極の装置としてのみ、*The End of the Road* において都市は機能しているのではない。この小説においては、登場人物達の都市経験が共同体に帰属しようとするときに障害となるのである。Horner を巡る異常な三角関係は、これら登場人物の都市経験を象徴している<sup>6)</sup>。彼らは都市の頹廃を地方の共同体において再現したために不運に巻き込まれるのである。さらに、Rennie の堕胎を巡る悩みは、彼女が Joe と初めて出会った都市 New York においてなら、秘密裡に解決できる悩みである。それが Wicomico という小さな田舎町にいたために解決できず、その共同体との間に軋轢を生じた結果、Rennie は死亡し、Joe は退職に追い込まれる。都市経験を内包する登場人物が、地方の共同体に帰属しようとする場合の問題を、この作品は明るみに出している。

*The End of the Road* のユニークさは、人間が疎外された状況を描くこのような方法にあるだけでなく、結局、そのような登場人物達が自分の帰属すべき場所を見いだせないまま終わる点にある。Horner は、黒人医師のもとで治療を受ける約束はしているが、それは彼の属すべき新しい共同体というよりは、共同体から隔絶され隔離された仮の帰属地であり、職を失った Joe の将来は明らかにされない。Horner の最後の言葉である"Terminal"はこのような、登場人物達の"dead end"を明示している。

*The End of the Road* において、都市は経験のための場所として位置付けられ、その対極に共同体が設定されていた。このような構図は、作者 John Barth の文学的履歴にも合致している。Barth は地方の町 Cambridge に生まれたが、Baltimore で文学経験を積み、New York で教

職に就いた経験もあり、Maryland の自然に囲まれた地方性豊かな文学を書いている。*The End of the Road* における都市の機能と Barth の経歴における都市の働きは相同的な関係にある。それは、経験としての都市と、無垢なる共同体としての自然との対立構造としても読むことができよう。次節ではこの対立構造がもっとも明らかな Barth の3冊目の小説 *The Sot-Weed Factor* (1960) を素材にして、Baltimore を含む Maryland の文学伝統と都市の機能を論じる。

### 3. 都市性を包摂する地方性

本稿の1.で概観した Baltimore の文学伝統は、Baltimore が属する州である Maryland の文学伝統に包摂されている。では、Maryland の文学伝統とはどのようなものだろうか。

Maryland に最初に登場した、いわゆる文学は Ebenezer Cook(e)の風刺詩だとされている。Cooke は London の裕福な商人の息子で、父は Maryland に広大なたばこ農場を所有していた。1694年、父の代理人として植民地に赴いた Cooke は、その経験をもとに "The Sot-Weed Factor" (1708) という長編詩を執筆、出版した。これは当時人気のあったヒューディブラス風というスタイルを使った風刺詩であった。

この長編詩は、語り手を非道い目に遭わせた植民地の人々やその土地に対して激しい呪詛を述べて終わる。このような植民地を批判する内容の詩を出版したにもかかわらず、Cooke は Maryland 最初の桂冠詩人とされている。ただし、Cooke が桂冠詩人になった経緯ははっきりしておらず、植民地議会に Cooke のパトロンが議長として在籍していたので、おそらく冗談で与えられたものだろうとも考えられている (Shivers 38)。

"The Sot-Weed Factor"における「植民地に対する批判」は、かなり冗談めいて書かれたものであり、そのエピソードも誇張・法螺話の類に近い。その経歴からして虚実曖昧である作者 Ebenezer Cooke の"The Sot-Weed Factor"のような虚実不明のナラティブは、さらに時代を遡り、Maryland を最初に探検した Captain

John Smith の紀行文や日記文にまでその源泉を求めることができる。

例えば、Disney の映画化によっても有名な、Pocahontas による処刑直前の Captain John Smith の救出劇は、アメリカ植民時代の神話とも呼べるエピソードであるが、ことの真偽は怪しく、本当にあったのかどうか不明である。それは、Smith が数ある著作の中でこのエピソードを初めて紹介するのが、Pocahontas が London で Lady Rebecca として有名になった後だからであり、一方で Pocahontas は、Smith とのエピソードについて何も書き残していないからでもある。このエピソードの真偽を巡る争いは、まず、Henry Adams が匿名の書評で口火を切り、その後も議論の対象となり、Barth の大学での同僚だった Philip Young など「英米の文学的想像力の源泉」(392)として論じている<sup>7)</sup>。

Barth は3冊目の、700ページ以上もあり、Cooke の風刺詩と同じタイトルを持つ長編小説 *The Sot-Weed Factor* で、Cooke が "The Sot-Weed Factor" に書き込んだエピソードをもとに、虚実取り混ぜて植民地時代のアメリカを描いている。この小説には、Ebenezer Cooke はもちろん、小説中に引用される文書の語り手として、Captain John Smith も登場する。他に Isaac Newton や Baltimore 卿などの実在の人物と虚構の人物が入り乱れて登場し、全体としては、歴史小説の方法論を利用・悪用した長編小説と云える。この小説中には、Cooke の詩も引用され、Barth がそのスタイルを真似て、続きを書いている。このことから、作家生活の初期において既に、Barth は Maryland において特徴的な真偽不明のナラティブの伝統を意識していたことがわかる。

本稿の1.で論じた Baltimore の文学史は、その都市が存在するアメリカのいち地方である Maryland の文学史に包摂されている。さらに Maryland の文学史はアメリカの文学史に、アメリカの文学史は西洋の文学史に、果ては人類全体の文学史に包摂されることになる。この連綿と続く文学史の包摂関係は、Barth がしばしば作品において取り上げ、またメタフィクションの特徴的技法としても論じられることの多

い、物語の中に物語があり、その中にまた物語があるという「入れ子構造 (Chinese boxes / nesting)」と相同的な関係にある。Barth がそのエッセイにおいて宣言した「可能性を尽くす文学 "literature of exhaustion"」とは、このように連綿と続く文学の歴史を十分に認識しながら、新たな文学を創り出す試みに他ならない。その出発点として、Baltimore という都市性と Maryland という地方性がある。Barth にとって Baltimore や Maryland の文学史は、自身の文学を人類全体の文学の中に位置付ける重要な核の役割を果たしているのである。さらに、その包摂関係は、メタフィクションの技法である「入れ子構造」として、作品において構造化されるのである。

また、本稿2.で論じた都市表象のあり方と関連づけるならば、Barth の都市表象のユニークさは、都市なら都市を、自然なら自然を、単に相互に対比し、片方を他方の背景として描くのではなく、それぞれが包摂しあい影響しあう構造で書く点にあった。都市を都市だけで論じるのではなく、その都市の置かれたもう一回り大きな環境との関係で描く。これもメタフィクションにおける「入れ子構造」と相同的であり、この「入れ子構造」を俯瞰する視点こそが、メタフィクションの成立条件でもあるはずだ。都市と地方という二項対立を、対立として描くのではなく、一方が他方に包摂された構造で描くためには、対立構造を無化するメタレベルの視点が必要になるからである<sup>8)</sup>。この意味において都市性と地方性の対立構造を無化する傾向のある Barth の作品が、メタフィクションという小説技法を駆使するのは必然とも云えるだろう。

Barth にとって、Baltimore の文学史や Maryland の文学史は、そのエッセンスと特徴において Barth 文学の核を成しつつも、都市性と地方性という二項対立が成立し解消する過程において、メタフィクションに必須の視点であるメタレベルを要求する契機としても機能しているのである。



## おわりに

Marshall McLuhan は、その独特の預言者的言い方で、都市について次のように述べている。

都市は観光客向きの文化的幽霊としてならずともかく、もう存在しない。どのハイウェイの食堂にもテレビがあり、新聞があり、雑誌がある。それはニューヨークやパリと、まったく同じように国際的だ。

かつて農民はいつも都市郊外の寄生者であった。彼らはもはや実在しない。今日、彼は「都市」の住人なのである。(101)

興味深いのは、「都市」は存在しないと宣言しながら、「『都市』の住人」と書いている点だが、このいっけん自己撞着にみえるレトリックは、引用文中にあるふたつの都市の概念規定がずれていることから生じている。「都市」は存在しなくなったのではなく、McLuhan の時代に変質し、拡大したのである。ここで考えられている「都市」の性質とは、情報の伝達そのものに他ならない。情報伝達を象徴する存在としての都市の消失を McLuhan は正しく指摘している。60年代において、メディアの急速な発展と公害などの都市における否定的側面の発見に伴い、都市周辺部の郊外が拡大した。本稿の2で検討した、*The End of the Road* における Wicomico もそのような時代背景のもとで、旧来の共同体としてと同時に、快適な郊外としても機能している。Joe は快適な環境で研究を進め、必要に応じて、都市の図書館に向かうのである。

また、子供を育てるためにも、郊外は適した場所であり、その背景にはアメリカにおける第2次世界大戦中から戦後にかけての多産奨励と家庭リヴァイバルの流れがある(荻野 31)。ふたりの子供がいる Morgan 家は、隣人と協定を結び、どちらかが外出する際に、ふたつの家庭を繋ぐドアを開けておき、隣家の子供に注意をするようにしている。このような牧歌的とも云える共同体を支えにして、家庭リヴァイバルはあるのだが、そのネガティブな発露こそ既に検討した中絶に対する規制強化なのである。*The End of the Road* においては、家庭や共同体など

のイメージが喚起する肯定的な側面と同時に、それと表裏の関係にある否定的な側面も漏らさずに描かれている。

McLuhan の分析に拠れば、都市は情報伝達技術の発展に伴い、郊外へと拡散し、やがては地球規模にまで拡散することになる。そのような都市拡大は60年代以後さらに加速することになる。郊外から車で出掛けて資料収集をする Joe Morgan が、自宅に居ながらにして資料収集することができる時代が来るのは、すぐ先のことだ。そのような時代に都市は現実の世界ではなく、仮想現実の世界に存在することになるだろう。

## 註

1. Barth の経歴については、エッセイ集 *Friday Book* を参照した。
2. 岩本 62。
3. Poe や Key の経歴と Baltimore との関連については、Shivers を参照した。また更に、簡にして要を得た Baltimore の文学史についてのまとめがある (22-23)。
4. Tony Tanner は、このような Barth の初期作品の特徴を、意識を規定する環境が衰退し、意識が中心に描かれていると考えている (240)。Tanner のように、登場人物の思考や発言を取り上げて論じるのは、*The End of the Road* 批評史の初期において中心的だった。
5. アメリカの堕胎を巡る社会状況については、荻野を参照した。
6. New York における自由な性体験について、Morgan 夫妻がそれぞれ語る場面がある。
7. Smith と Pocahontas のエピソードを巡る論争史については、Lemay に詳しい。
8. フィクションにおける「入れ子構造(nesting)」については、無限性との関連で Stewart も論じている (125-9)。

## Works Cited and Consulted

Adams, Henry. "Captain John Smith." *North*

- American Review* 104 (1867): 1-30.
- Allen, Mary. *The Necessary Blankness: Women in Major American Fiction of the Sixties*. Urbana: U of Illinois P, 1976.
- Barth, John. *The End of the Road*. Garden City: Doubleday, 1958.
- . *The Sot-Weed Factor*. Rev. Ed. New York: Doubleday, 1967.
- . *Sabbatical: A Romance*. New York: Putnam, 1982.
- . *Friday Book: Essays, Lectures, and Other Nonfiction 1984-94*. Boston: Little Brown, 1984.
- Gelfant, Blanche Housman. *The American City Novel*. Norman: U of Oklahoma P, 1954.
- Lemay, J. A. Leo. *Did Pocahontas Save Captain John Smith?* Athens: U of Georgia P, 1992.
- Poe, Edgar Allan. *The Portable Poe*. Ed. Philip Van Doren Stern. New York: Penguin, 1984.
- Shivers Jr., Frank R. *Maryland Wits and Baltimore Bards: A Literary History with Notes on Washington Writers*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1985.
- Stewart, Susan. *Nonsense: Aspects of Intertextuality in Folklore and Literature*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1978.
- Tanner, Tony. *City of Words: American Fiction 1950-1970*. London: Jonathan Cape, 1971.
- Young, Philip. "The Mother of Us All: Pocahontas Reconsidered." *Kenyon Review* 24 (1962): 392-415.
- 岩本巖『変容するアメリカンフィクション』東京：南雲堂，1989年。
- 荻野美穂『中絶論争とアメリカ社会』東京：岩波書店，2001年。
- 巽孝之『アメリカ文学史』東京：慶應義塾大学出版会，2003年。
- マクルーハン・M, カーペンター・E 編著『マクルーハン理論』大前正臣，後藤和彦・訳，東京：平凡社，2003年。

## John Barth and Baltimore: Urbanism and Localism in His Metafictions

Yukio TAKESHITA

John Barth was born in Cambridge, Maryland, in 1930. At Johns Hopkins University in Baltimore, Barth began to study literature for the first time in his life and decided to become a novelist. The literary history of Baltimore and Maryland, therefore, influences his novels.

First, I introduce how Barth has described the literary history of Baltimore in his novels and also make clear that history's characteristic features and Barth's psychological attitude toward it. Secondly, by examining Barth's second novel, *The End of the Road*, I show the uniqueness of Barth's representation of Baltimore and how the conflict between urbanism and localism is projected into the structure of that novel. Finally, I survey the characteristic features of the literary history of Maryland, which includes Baltimore, and its influence on Barth's novels.

The essay concludes that the literary history of Baltimore and Maryland forms not only an important core to Barth's literature but also, analogically, plays a role as viewpoint for the nesting process in his metafictions, and also as the vanishing point for the dichotomy between urbanism and localism.

**Keywords :** John Barth, metafiction, literary history of Baltimore and Maryland, representation of the urban, nesting